

## 【vol.31】Ⅰ Ⅱ ⅢⅣⅤⅥⅦ

こんにちは、大沼です。

さて、タイトルについているこの表記、

『Ⅰ Ⅱ ⅢⅣⅤⅥⅦ』

見覚えありますでしょうか。

(※場合によっては文字化けしているかも知れません)

この、なんだかロマンを感じてしまう記号は、  
ローマ数字での数の表記法ですね。

意味は、アラビア数字で言う『1234567』。

もしかしたら見たことがあるかもしれませんが、  
このローマ数字の表記は音楽理論でも出てきます。

Ⅱ m7ーⅤ 7ーⅠ M7

みたいな感じで。

これ、数字の意味としては単純なのですが、  
スムーズに読むには、慣れるまでちょっと時間かかります。

ですがこの表記は、音楽を理解するためのツールとして非常に便利なので、  
自由に使えた方が楽曲全体の把握がすごく楽になってきます。

と言う事で、今回は、そのローマ数字とコード(コードネーム)の関係性のお話。

それでは、やっていきましょうか。

今回も、課題曲は『let it be』です。相変わらず構成がわかりやすいので。

まずは前回やった、イントロのコード進行の確認から。

## 譜例、サンプルコード進行 『let it be』0:00～

原曲のコード進行を、ざっくり大きく捉えるならば、この様な進行になっていました。

コードだけを抜き出すと、C—G—Am—F—C—G—F—C  
と、各コード2拍ずつの進行ですね。

見ての通り、C(メジャー)キーのダイアトニックコードのみで構成されています。

### ※key=C 時のダイアトニックコード

- 1、C (CM7)
- 2、Dm (Dm7)
- 3、Em (Em7)
- 4、F (FM7)
- 5、G (G7)
- 6、Am (Am7)
- 7、Bm(♭5) (Bm7(♭5))

前回の話ではこの、Cキーのダイアトニックコードで構成されている、  
というところが重要なポイントでした。

それを踏まえた上で、今回のテーマは『ローマ数字の表記』でしたね。

この『ローマ数字の表記』を何に使うのか、と言うと、  
上記の『ダイアトニックコードの番号付け』に使います。

これはすごく単純な話で、今まで載せていたダイアトニックコードの一覧表がありますね。

- 1、C (CM7)
- 2、Dm (Dm7)
- 3、Em (Em7)
- 4、F (FM7)
- 5、G (G7)
- 6、Am (Am7)
- 7、Bm(♭5) (Bm7(♭5))

この表の、一番左のアラビア数字のところをローマ数字に変えるだけです。

- I、C (CM7)
- II、Dm (Dm7)
- III、Em (Em7)
- IV、F (FM7)
- V、G (G7)
- VI、Am (Am7)
- VII、Bm(♭5) (Bm7(♭5))

と、こんな感じで。

最初はちょっと分かりにくく感じるかもしれませんが、一般的な音楽理論では、この表記でほぼ統一されていますので、少しずつ慣れていきましょう。

読み方は、普通に英語読みで、I =ワン、II =ツー、III =スリー、IV =フォー、～でOKです。  
(※場合によっては日本語でイチ、ニ、サン、シ(ヨン)～(度数呼びの時など)、と呼ぶ事もあります)

今はCキーで解説しているので、Cメジャースケールの構成音を例にしていますが、これをどのキーにも当てはめられるように、メジャーキーのダイアトニックコードをそれぞれの数字のみの表記にするとこうなります。

- | 3和音       | 4和音           |
|-----------|---------------|
| I         | ( I M7)       |
| II m      | ( II m7)      |
| III m     | ( III m7)     |
| IV        | ( IV M7)      |
| V         | ( V 7)        |
| VI m      | ( VI m7)      |
| VII m(♭5) | ( VII m7(♭5)) |

こうしておく、どの曲のどのメジャーキーでも、ローマ数字の所にキーに対応するメジャースケールの構成音を当てはめるだけでそのキーのダイアトニックコードがわかります。

例えば、前回例にあげた E キーの場合は構成音が、E、F $\sharp$ 、G $\sharp$ 、A、B、C $\sharp$ 、D $\sharp$ の 7 音でした。

今まではこう表記していましたが、

- 1、E
- 2、F $\sharp$
- 3、G $\sharp$
- 4、A
- 5、B
- 6、C $\sharp$
- 7、D $\sharp$

ローマ数字にするとこうなって、

- I、E
- II、F $\sharp$
- III、G $\sharp$
- IV、A
- V、B
- VI、C $\sharp$
- VII、D $\sharp$

で、そのまま E キーのダイアトニックコードにすると、

- I、E
- II、F $\sharp$ m
- III、G $\sharp$ m
- IV、A
- V、B
- VI、C $\sharp$ m
- VII、D $\sharp$ m(  $\flat$ 5)

と、この様になるわけです。

C キーのダイアトニックコードと見比べてみると、ちゃんと

コードに対して、番号と種類が一致している

ということがわかると思います。

### ※C キー

I、C

II、Dm

III、Em

IV、F

V、G

VI、Am

VII、Bm(♭5)

### ※E キー

I、E

II、F♯m

III、G♯m

IV、A

V、B

VI、C♯m

VII、D♯m7(♭5)

この様に、どのキーになっても、ダイアトニックコードの「構成」をわかりやすく表記するために、下のようなローマ数字の表記が使われている、と言う事ですね。

I (IM7)

II m (II m7)

III m (III m7)

IV (IVM7)

V (V7)

VI m (VI m7)

VII m(♭5) (VII m7(♭5))

さて、なぜわざわざローマ数字を使っているのか？についてなんですが、これはおそらく、コード内部のインターバルの表記(7th や 6th など)で、アラビア数字を使っているの、そちらと区別する為でしょう。

コードのルート表記もインターバルの表記も、どちらもアラビア数字だった場合、1M7( I M7)や 6m7(VIm7)、5sus4( V sus4)のようになってしまい、非常に紛らわしくなりますからね。

なので、最初は見づらいかもしれませんが、最終的には便利なものなので、少しずつ慣れていきましょう。

で、実際にローマ数字のコード表記をどう使うのか？というと、今やっている let it be のコード進行、

C-G-Am-F-C-G-F-C

がありますね。

Let it be は C キーの曲なので、当然 C キーのダイアトニックコードで構成されています。

I、C	(CM7)
II、Dm	(Dm7)
III、Em	(Em7)
IV、F	(FM7)
V、G	(G7)
VI、Am	(Am7)
VII、Bm(♭5)	(Bm7(♭5))

じゃあこの進行を、コードのルート音を取っ払って、純粹にインターバルの数字だけで見るとどうなるのか？と言うと、このようになりますよね。

I-V-VIm-IV-I-V-IV-I

先ほどの表と見比べると、ローマ数字と、コードの番号があっている事がわかると思います。

コード進行をこの様に見ることの出来るメリットとしては、

- ・進行全体の把握が楽
- ・キーチェンジが必要な時でもすぐ弾ける
- ・曲のトータル・センターに対する、それぞれのコードの役割がわかりやすい

などと言ったことが挙げられます。

それぞれのメリットについては、今後、実践しながら解説していきますが、とりあえず今は、何かコード進行があったとしたら、

### そのキーに対するダイアトニックコードの見方

#### ※C キーの場合

- I、C (CM7)
- II、Dm (Dm7)
- III、Em (Em7)
- IV、F (FM7)
- V、G (G7)
- VI、Am (Am7)
- VII、Bm(♭5) (Bm7(♭5))

と、

#### ローマ数字でのコード表記

- I (IM7)
- II m (II m7)
- III m (III m7)
- IV (IVM7)
- V (V7)
- VI m (VI m7)
- VII m(♭5) (VII m7(♭5))

この両方の表記どちらでも見ることが出来ると色々と便利、と、思っていてもらえれば。

重要なことなので何度も言いますが、音楽の知識は

**“慣れるまではちょっと大変、だけど慣れたら超便利”**

ですので。

と、言う事で、今回はここまでです。

今後も引き続き、色々な曲を題材に、これまでの知識を使って

コードとフレーズの分析、さらに、その楽曲全体の分析をやっていきましょう。

特に『カッコいいアドリブがしたい』というならば、  
主要スケールを覚えるのと同じくらい必須の知識です。

では、また次回。

ありがとうございました。

大沼